

身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高める指導
—保育者の「言葉がけ」に着目して—

Involvement of enhancing teacher-children interaction
during body expression play :
Focusing on the teacher's words in the Kindergarten

遠藤 晶*

ENDO, Aki*

要旨

本研究の目的は、身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高めるためには、保育者のどのような「言葉がけ」が有効性を発揮するかを検討することである。この目的を達成するため、まず、幼児教育における表現力の育成に関する先行研究を精査して課題を抽出し、次に、幼稚園において幼児の身体表現遊びの観察を行い、そのデータから抽出されたエピソードを分析した。その結果、保育者と幼児の相互作用を高めるのに有効な保育者の「言葉がけ」を指導上の行為概念として抽出し分類することができた。幼児が身体表現遊びを楽しむ過程で保育者と幼児の相互作用を高めるには、保育者による「肯定」「反復」「質問」「同調」「言語化」「誘導」「提案」の7種類の言葉がけが重要な役割を果たしていることが明らかになった。これらの言葉がけは、保育者が身体表現遊びの指導を構想するうえで具体的示唆を与えるものと期待される。

1. 問題の所在

幼稚園教育要領の「表現」の領域では、幼児が感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむことがねらいの一つとしてあげられている。また、「言葉」の領域では、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを、自分なりに言葉で表現することが示されている。幼稚園や保育所の教育・保育において、幼児が表現力を獲得することは、認知的発達、情緒的発達、社会性の発達と重要な関連があり、幼児教育における表現力の育成は重要な課題である。以下に、先行研究を通して、身体表現遊びの重要性と指導の課題について概観する。

(1) 身体表現遊びの位置づけと重要性

幼児教育における身体表現について、本山(2003)¹は、「幼児教育で「身体表現」の用語が使用される場合は①イメージをもとにした『動きの表現』、②音楽的なものに付随する『動きのリズム』、③日常的に『自然にあらわれるもの』に大別されるが、これらの枠組みが明確にされておらず3種類の内容を包括しているのが実態である」と述べている。

本研究で扱う身体表現遊びは、本山がいうイメージをもとにした『動きの表現』と同様の意味を持つ。鈴木(2008)²も、身体表現遊びを「模倣遊びやごっこ遊びへの欲求を基礎にした幼児たちが自らのイメージを自らの

動きで表すもの」と述べている。本研究における身体表現遊びは、模倣遊びやごっこ遊びの要素を含む言葉と身体を使った表現を保育者や他の幼児とともに楽しむ活動を指す。

長野(2010)³は、保育における身体表現について、「からだを使った遊びに伴う自己表現や他者とのコミュニケーション等の精神活動を促して、言葉の発達ならびに健やかなこころとからだをバランスよく育む活動」と述べているように、幼児にとって重要な活動である。

(2) 身体表現指導の課題

松山ら(2011)⁴は、幼稚園・保育所600園を対象としたアンケート調査によって、保育者が身体表現活動の指導に対して難しさを感じていることを明らかにしている。特に曲や教材を含めた環境構成、幼児の興味に応じた展開・援助・指導に対する難しさがあることを示している。

遠藤ら(2011)⁵は、保育者が難しさを感じる理由の一つとして、幼児の動きや表情を見ながら関わる必要があるためとしている。

身体表現遊びの展開は、保育者の関わりによって大きく変化し、幼児の発達、身体表現の環境、保育計画などに左右されると考える。

①身体表現の発達理解

古市(2013)⁶によると、3歳児は、速いリズムに合わ

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

せたり、歌いながら動くということは困難であるが、身近な動物の動きを模倣したり、簡単なストーリーの展開を楽しめる年齢である。また、4歳児は、感情の発達とともに、友達との関わりが多様になる年齢であるが、恥ずかしさが身体表現に影響する年齢である。「踊りたいけど友達が踊らないからやめておこう。」「踊りたくないけど、友達が踊るから一緒にやってみよう。」など友達の影響をうけながら表現意欲を高めていく年齢でもある。5歳児は、友達と一緒にダンスを楽しんだり、友達の表現に刺激を受けて新しい自分なりの表現を考えたりするようになる年齢といわれている。

身体表現活動では、このように幼児の発達に応じた指導が必要である。

②保育計画と展開

身体表現遊びの活動では、保育者にとっても幼児にとっても心的負担の少ない遊びの環境や構成を考え保育計画を十分に考えておくが必要になる。十分に考えられた保育計画とともに、遊びの場で生まれる幼児の心の動きを読み解きながら保育を展開することが求められる。

鈴木(2002)⁷は、ストーリーのある身体表現遊びでは模倣の機能が重要な役割を果たしていると述べている。何らかの情報を取り込み、それを加工したり、生まれ変わらせたりして独自の表現を生成させる力が生まれ、そこで活動する幼児どうしの関係性が重要だとしている。

古市(2013)⁸は、幼児の身体表現の指導において、保育者自身が緊張していると幼児に身体表現の楽しさが伝わらないと指摘する。保育者自身に身体表現に対する苦手意識がないことも重要な要件であると述べている。

このように遊びを展開においては、幼児の関係性を理解しながら、幼児の表現を読み取り応答できる指導力が必要である。

③身体表現の理解と言葉がけ

渡辺ら(2013)⁹は、6個の草を円形に配置し、身体表現を行う「草むらごっこ」を2歳児・3歳児・4歳児・5歳児を対象に実践し、幼児と保育者の実践効果を述べている。

幼児については次のような効果が報告されている。

- ・動くことが楽しいからまたやりたいと楽しみに待ち、日常会話が盛り上がるようになった。工夫したり、考えたりして自分らしさがでた。
 - ・保育者の言葉かけを真剣に聞く姿が見られた。
- 一方、保育者については、次のような効果が報告されている。
- ・幼児の動きや表情をよく見るようになった。
 - ・保育者主導でなく受け止めや待つ姿勢ができてきた。
 - ・保育の流れの中で幼児の言葉や動きをよく受け止め、言葉をかけることを考えながら保育ができるようになった。

このように、身体表現活動は、保育者が幼児の身体表現を理解したうえで適切な言葉がけをすることによって双方のやりとりが高まるといえる。

幼児が他児の動きや動作、表現に興味をもち、相手と関わり自己を高めていく充実した身体表現活動を行うためには、保育者が幼児の発達を理解し、遊びの環境や構成を考慮した保育を計画するとともに、瞬時に変化する保育者と幼児の相互の関わりを理解し、応答できる指導力が課題となる。特に、身体表現遊びの展開において、保育者の言葉がけは重要な課題となる。

2. 本研究の目的

以上の課題を踏まえ、本研究では、身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高めるために、保育者が幼児を指導する際の言葉がけの有効性を検討する。具体的には、幼児の身体表現遊びの観察事例を通して、指導の際の保育者の言葉がけとその効果を分類し、保育者の指導上の知見を得ることを目的とする。

3. 研究方法

(1) 研究協力園と研究協力保育者

大阪府S幼稚園、4歳児が在籍する年中クラス(25名)で観察を行った。研究協力保育者は、対象クラスの担任保育者である。担任保育者は15年の経験を持ち、3歳児年少クラスから継続的に担任として幼児に関わっている。

(2) 保育観察とエピソード収集の手続き

①身体表現遊びの内容検討

筆者は、研究協力園にて2010～2012年度にかけて身体表現遊びを継続的に観察した。保育者と幼児との相互関係を重視しながら、身体で表現する遊びが展開できるような内容の原案を作成した。この原案をもとに、研究協力保育者が、幼児の実態に即して遊びの内容、指導方法などを工夫し、観察当日の保育指導案を作成した。

②保育指導案

本研究の保育実践として作成された活動の内容とねらいおよび準備物は次の通りである。

1) 活動の内容

『おおきな おおきな おいも』の表現遊びを楽しむ

2) ねらい

- ・さつまいもの手触り・匂いを感じ、自分自身がおいもになってみる。
- ・いもほりに行ったことがある幼児はその様子を思い出しながら、そうでない幼児は、想像しながら様々な表現を楽しむ。
- ・みんなで大きな大きなおいもを作る表現をする。

3) 準備物

- ・絵本 赤羽末吉『おおきな おおきな おいも』

福音館書店, 1972.

・さつまいも3こ

身体表現遊びの内容検討段階では、『おおきな おおきな おいも』の絵本に描かれている絵と言葉の面白さで遊びが広がることを想定した。とりわけ、「むくつとなる」「えっさかほっさか」と言いながら、言葉と身体表現の楽しさを幼児間で共有することを考えた。

保育指導案では、幼児が実物のさつまいもに触れ、よく観察し、感じたことを話したり、さつまいもになって遊んだりするよう設定された。

③保育観察

2012年11月5日に保育観察を行った。保育観察の実施にあたっては、園長およびクラス担任に保育観察の趣旨を説明し、ビデオ撮影で得られたデータなどは個人情報管理の厳重な管理と適切な処理を行い、研究以外の目的には使用しないという説明をして了承を得た。

④観察記録の分析

ビデオの記録をもとに保育者と幼児の言葉と身体表現を時間軸に沿って記録した。身体表現遊びは約37分間継続して展開されていた。その中で、絵本の内容、保育者の関わり、他児の表現の影響を受けて、幼児の身体が多様な表現が観察された。身体表現の始まりと終わりを幼児ごとに観察し、言語の記録は聞き取りが可能な限り記述した。動きの読み取りについてはビデオ記録の範囲内に、誰がどのような表現をしたかを記録し、やりとりの対象が特定できるエピソードとして整理し分析を行った。

4. 結果と考察

(1) 身体表現遊びの展開

保育観察当日、幼児は登園した後各自好きな遊びをする時間があり、その後朝の集まりへと進められた。朝の集まりでは、保育者から幼児に今日の一日の流れが伝えられた。特に、観察のためにビデオ撮影をすることが説明された。

その後、保育者は用意していた絵本を棚まで取りに行き、ゆったりと持ってきて幼児に示した。「見えるところに来てください、ちっちゃい本だから。」と、幼児に絵本が見えるところに移動するように声をかけた。さらに保育者は、「はじまってもいいですか。」と幼児に問いかけ、「静かに、なったら、はじめましょ。」とリズムのある言葉で伝えた。幼児も「しずかになったら、はじめましょ。」と応え、静かに話を聞く体勢が整った。

エピソード文中のTは保育者、Cは幼児、○児は特定幼児を示している。

①絵本を楽しむ

保育者は『おおきな おおきな おいも』の絵本を提示した。絵本の読み聞かせは約8分46秒間続いた。静か

に座って聞いている幼児もいたが、途中絵本の中の〈おおきなおいもを食べちゃうよ〉の場面から、A男児が席を移動し、絵本の言葉を表現し始めた。

エピソード①

部屋の後ろで座っていたA男児が、「おおきなおおきな」と言いながら右手を上げて、右隣に座っているB女児の頭に手をのせた。すると、B女児に身体をかわされてしまった。A男児は右手を上げたまま立ち上がり、「わー」「わー」と言いながら両手を広げて部屋の前方に歩いて移動した。椅子が置かれたところで「がおー」と言いながら怪獣になりきっている。その後、保育者が読んでいる絵本に近づき絵本を見続けた。

A男児が声を出しながら移動していたが、保育者は、幼児たちが絵本の世界を楽しんでいることを確認し絵本を読み続けた。そのため、幼児たちは、絵本の世界を共有し続けることができた。

②お互いが見えるように円になって座る

保育者は、絵本を読み終わると、幼児と対面で座っていた場所を移動し、お互いが見えるように一重円になって座ることを幼児全員に促した。

エピソード②

T:「さあ、きょうはみんなで、まあくまあく、なれるかな。お手々つないでまるくなりましょう。なれるかな。そのまま、まるくなったら、そのままゆっくりすわりましょう。」

幼児たちは、絵本を見る時には保育者の前に座っていたが、絵本を見終わると、一重円になるために移動した。

保育者も一緒にその円に加わり座った。その際、手を繋ぐこと、お互いの顔が見えるように座ること、ゆっくり座ることを、リズムのある言葉で伝えた。座ってじっと絵本を聞いていた幼児であるが、隊形が変わることで次の遊びへの期待が高まったようであった。

③実物を感じる

身近なものでも改めて、見て、触って、匂いを嗅ぐことで対象の理解が深まる。身体表現にとって実物に触れることは大切な動機づけとなる。

エピソード③

幼児が座った後、保育者は用意していたさつまいもを袋からゆっくりひとつ取り出し「これは何かな」と言いながら幼児に見せた。さつまいもが出てきたところで、幼児らは座ったまま両手を上げ伸び上がった。2つ目のさつまいもが出てきた時には「わー」と声をあげ、3つ目が出てきたところで、さらに大きな声を上げて手を叩いた。

保育者がさつまいもを袋から取り出すと、幼児はさつ

まいもが出てきたことを見て喜び、身体でその喜びを表現した。保育者はその様子を確認して、一つ一つゆっくり提示した。お話に出てきたさつまいもの実物が目の前に出てきた驚きと喜びを全身で表現している。その喜びの表現は徐々に大きくなっていった。

その後、保育者はさつまいもを見たり、匂いを嗅いだり、触ったりすることを伝えた。その際「においをかいだり」と言った後大きく息を吸う動作をした。また、「さわってみたり」と言いながら手でさつまいもを大きな動作でなでた。優しく丁寧に扱うことも伝え、ゆっくり幼児に手渡した。幼児は保育者が示したような動きで、さつまいもを手に取り、形、手触り、匂いを楽しんだ。

④さつまいもに関連することを話し合う

幼児は、さつまいもを手にしながらか「おいも見たことある。」「おいもごはん食べた。」など、経験したことを話し始め、さつまいもに関連する話題が広がった。

エピソード④

C:「食べたい。」
T:「食べたいね。」 b
C:「なんかにおいかいだら めっちゃいいにおいや。」
I 女児:「明日おいもほりや」
T:「そうだね。」 a 「明日おいもほりって知ってた?」 c
T:「I 女児ちゃんが、明日おいも掘りがあるよって言ってくれたね。おいも掘りしたことあるよって言ってくれたお友達もいたけれど、おいもってどこにあるのかな。」 c
C:「つち」

実物を手にして「おいもを食べたい。」「いいにおい。」と感覚を楽しんでいるうちに、幼児の経験から、“おいも掘り”“土の中にいもがある”という連想が広がった。経験したこと、知っていることを言葉にしながらいメージを共有した。

⑤おいもに関連する動きを楽しむ

保育者はおいもに関連する動きとして、保育者がさつまいもを掘る動きを尋ね、話や動きが展開した。

エピソード⑤

T:「じゃあ土の中においもさんがいるんだけど、どうやって掘ったらおいもさんがでてくると思う?」 c
C:「スコップ、スコップ、スコップでこうやって。」
手で土を掘る動きをした。
C:「スコップあかんで、傷つくから。」
T:「傷つくねんて。スコップでカンカンカンってしたら傷つくんやって。」「じゃあ、どうやってあげたらいいのかな?」 c
E 男児:前に身体を乗り出して、同じように手で掘る

動きをした。

T:「手でクルクルクル。」 d 幼児の方を見ながら言葉をかけた。

保育者はE男児の方を見ながら「手でクルクルクル。」と声をかけたが、E男児は、自分の動きを保育者が見ていて、自分の動きにリズムを合わせてくれたことに気づいた様子であった。

次に、幼児自身がさつまいもになってみる遊びへと展開した。

エピソード⑥

T:「みんな、おいもさんに、変身できる?」 c
A 男児:うつ伏せで床の上に滑り込んだ。
T:「ぐるりん」 d と A 男児の動きに合わせてように言葉をかけた。
T:「あー、おいもさん」 e と A 男児に言葉をかける。
A 男児:仰向けになって手を合わせ、身体を左右にゴロゴロする。
G 男児, L 男児, M 男児, H 男児, N 男児もうつ伏せになる。
T:「あー、土の中においもさんがたくさんいてる。」 e
F 男児:手を胸の前で重ね座っていたが、同じように床の上に滑り込む。
T:(幼児が寝ている様子を見て)「あー、たくさんおいもさんおいもさんいてる。」 e 「あーぐるりんこ、おいもさんぐるりんこ」 e
O 男児:円の外側に仰向けで寝転び膝を抱えた。
I 女児, J 男児, K 男児, L 男児は、O 男児と同じように仰向けで寝転び膝を抱えた。

保育者に「おいもさんに、変身できるかな」と尋ねられ、それに応える形で幼児の身体が大きく動き始めた。そのきっかけは、A男児がうつ伏せの姿勢で床の上に滑り込んだことである。それに対して、保育者が動きに合わせて言葉をかけ、「おいもさん」と動きを言語化した。その様子を見て、5人の幼児が同じように滑り込んだ。さらに、保育者は「あー、土の中においもさんがたくさんいてる。」と伝えるとF男児が滑り込んだ。その時、保育者が「あーぐるりんこ、おいもさんぐるりんこ」と転がる動きを想像する言葉を伝えたため、O男児は寝転



写真1 仰向けになっておいもに変身する

んで膝を抱えた背中を丸め転がる姿勢になった。近くにいた4人の幼児もその動きを模倣し転がる動きが広がった。保育者によって認められた一人の動きが、近くの幼児に伝播し、その動きを楽しむ遊びが展開した(写真1)。

しばらくの間、保育者は幼児が各自でさつまいもに変身している様子を見ていた。全体の遊びが落ち着いた様子を見て、G男児が寝転んでいるのに注目し、G男児の動きを「お休みしている」と表現した。

エピソード⑦

T:「見て、お休みしているよ。」eと言葉をかける。
G男児:目をつぶって寝転んでいる。
A男児:「朝やで、朝。」
T:「もう朝?もう朝になったんやって。」a
T:G男児が目をつぶって寝転んでいる所に近寄って「やさしくこしょこしょってしようか。」fと身体に触れる格好をする。

G男児は保育者の声を聞いても、寝た姿勢のままじっとして「お休みすること」をし続けた。それに対してA男児が、朝になったと言ったことを受けて、保育者は“起きること”“起こすこと”を取り入れた遊びを提案し、やさしくくすぐる遊びを加えた。その後、くすぐる感覚を楽しむ遊びへと変化し、再び動きが活性化した。

やがておいもの表現が広がり、幼児は肩を寄せ合い寝ながら大きなおいもになっている。じっと横になって寝ている様子を見て幼児に尋ねた。

エピソード⑧

T:「もう大きくなったか聞いてみようかな。おいもさんに、聞いてわかるかな。大きくなったか、どうやったらわかるかな。」c
C:「トントントン。」
T:「トントントンだって。」b
T:「やってみようか、トントントン、大きくなったかな。」c
C:「大きくなったー。」
T:「もうそろそろ、先生がおいもを掘ってもいいかな。先生掘りにいくよ。」g

保育者の間に対し幼児は「トントントン。」と返答した。やさしい動きで身体接触を求めるような、やりとりのある遊びが幼児の方から提案された。じっと横になりさつまいもが土の中に寝ている表現を楽しんでいるが、動きが停滞してきたため、保育者は遊びを展開するきっかけを、幼児の返答によって見つけたようであった。

その後大きくなったおいもをく掘る遊びに展開した。

エピソード⑨

T:横になっているH男児に近寄り手を引いて「うんとこしょ、どっこいしょ。」と起こし始める。

T:「やさしく、やさしく抜いていこう。」H男児の手を取ろうとする。

H男児:保育者に引っ張ってもらおうと、手を出す。
T:「まだまだいてる。寝かしておいたげようか。トントントン、まだお休み中? まだまだ? どっこいしょ、どうしよう。さあ、みんなでやさしく掘ってみよう。」

ここで、“おいもを起こす”“おいもを掘る”遊びに展開した。「トントントン」と声をかけられた幼児が、保育者に「うんとこしょ、どっこいしょ」と声をかけて起こしてもらう遊びである。特にH男児は保育者に手を引っ張ってもらうのを楽しみしているようであった。

保育者が「掘る」、それに対して幼児は「掘られる」側にいることを理解し、身体を保育者にあずけている。保育者が近寄ってきても、じっと眠った振りをしている幼児に対して、保育者は「お休み中? まだまだ?」と声をかけて、幼児が自分で考えた動きをすることを促した。

正高(2001)¹⁰は言葉を習得する際に身体の動きを伴う理解が不可欠であるとし、どのような言葉も「からだ的思考」の介在なしには習得不可能と述べている。エピソードでは、起こすー起こされるという役割を理解したうえで、身体で表現する遊びとして保育者と幼児の間で展開した。

⑥遊びの楽しさを共有する

しばらく保育者対幼児の遊びが続いたが、遊びが心的飽和状態になったことを感じて、保育者は幼児と遊びの体験を話しあうために呼びかけを始めた。

エピソード⑩

保育者は幼児から少し離れた場所に座って、「おいもさんみんな来れるかなー、おいもさんみんな来れるかなー、おいもさんみんな来れるかなー。」と呼びかけた。

幼児は保育者の前に集まり始め、保育者は小さい声でリズムカルに「みんなでちっちゃいおいも、みんなでちっちゃいおいも、みんなでちっちゃいおいも。」と、肩をすぼめながら、肩を寄せ合う動きをした。幼児もその動きを真似て肩を寄せ合う遊びをしている。少し離れたところで、おいもになって寝ていた幼児も起き上がり、「ちっちゃいおいも」のリズムに乗って肩を寄せ合った。

大きいおいもになる遊びとは対照的に、遊びの終わりに小さいおいもになる遊びを提案した。保育者が小さい声で「ちっちゃいおいも」という言葉のリズムは、遊びの余韻を楽しみ、全員で遊びの終わりを感じようとするものであった。その後、保育者はやさしいもグーチーパーの手遊びをして、明日おいも掘りに行くことを伝え、遊びを振り返った。

(2) 保育者の言葉がけ

本研究では、身体表現の導入として絵本が用いられ、さつまいもを見て・触って・匂いを嗅ぐなど、さつまいもを感覚で捉えることを楽しみ、他児と言葉やイメージを共有する活動から、手や身体を使った多様な動きを生み出す遊びに展開した。

集団保育では、幼児の思いが同時に伝えられるが、保育者は幼児の表現したい、伝えたい気持ちを受け止めつつ、幼児とのやりとりを繰り返すが必要になる。本研究の身体表現遊びの展開では、保育者の多様な言葉がけが重要な役割を果たしていた。

表1は、エピソード④～⑧で示した幼児の表現に対する保育者の言葉がけを、その内容ごとにカテゴリー化したものである（エピソード文中にa～gで示した）。幼児の表現に対して見られた保育者の言葉がけについて、次の7種類に分類し、a～gの順に「肯定」「反復」「質問」「同調」「言語化」「誘導」「提案」と名称を付与した。

表1 保育者の言葉がけの内容

記号	カテゴリー	内 容
a	肯定	幼児の発言を肯定的に受け止め発言する
b	反復	幼児の発言に対して同じ言葉で復唱する
c	質問	具体的な方法、結果などを尋ねる
d	同調	幼児の動きにオノマトペや声の抑揚を添える
e	言語化	幼児の動きに意味付けをする
f	誘導	一緒にしようとする
g	提案	新しい遊びの提案

① a 肯定

エピソード④で、I 女児が「明日いもほりや」と発言したことに対して、保育者は「そうだね。」と返答し、「いもほり」という幼児の発言を肯定的に受け止めた。保育者は、「いも掘りに行ったことがある幼児がその様子を思い出して様々な表現を楽しむこと」を保育のねらいとしていたこともあり、その発言を肯定的に受け止めたと思われる。この後、幼児と保育者の話題はいも掘りについての具体的な話題へと展開した。

また、エピソード⑦では、G 男児が目をつぶって寝転んでいるのを見て、A 男児が「朝やで、朝。」と発言した。それに対して、保育者が「もう朝？もう朝になったんやって。」と発言した。やはりここでも、「朝」という発言を肯定的に捉えていた。いずれも、保育の流れに重要な発言が幼児から発せられた場合、保育者が肯定的に受け止めている。それに対して幼児は、自分の発言を受け止めてもらえて、嬉しそうな表情をしていた。

② b 反復

幼児の発言に対して、保育者が同じ言葉を復唱する発言である。

エピソード④で示したように、幼児がさつまいもの実

物を手にした際に、「食べたい」と発言したことを受けて、保育者が「食べたいね。」と、そのまま反復した一例である。また、エピソード⑧で示したように、保育者がおもいが大きくなったか聞いてみる方法を幼児に尋ねた際、保育者の対面に座っていた幼児が「トントントン」と言いながらドアを叩くような動作をした。幼児の声は保育者に届くほど大きな声ではなかったが、保育者は、小さな声と小さな動きを逃さず拾い上げ、「トントントンだって」と丁寧に反復していた。幼児は、保育者の様子を見て頷き、保育者が「トントントン」と言いながら動作してくれるのを待っていた。

幼児は、自分の発言を保育者が反復することを、自分の思いを受け止めてもらえたと感じているようで、明るい表情が見られ、安心感を得ているように思われた。

③ c 質問

エピソード⑤では、保育者が幼児に、さつまいもをどうやって掘るか質問した。このことによって、幼児が掘る動作を思い出し、動きを考える機会となっていた。

また、エピソード⑥では、保育者が幼児に「おいもさんに変身できる？」と質問している。「変身できるかな」と聞かれて、幼児たちは全身でさつまいもになるとどうなるかと考え、身体で表現しようとした。A 男児は床の上に滑り込んでさつまいもを表現したが、各自が思うように身体で表現した。

どうするか、どうなるかなど、保育者が具体的な内容、方法、結果を質問することは、幼児が具体的な動きを考えるきっかけになるので、幼児の動きを具体的に引き出すのに役立つ言葉がけといえる。

④ d 同調

エピソード⑤では、E 男児が身体を前に乗り出して手で掘る動きをした際、保育者が「手でクルクルクル。」と、E 男児の動きに音や状態を表す擬音・擬態語であるオノマトペと声の抑揚を添えていた。エピソード⑥でも、A 男児がうつ伏せで床の上に滑り込んだ際、保育者が「くるりーん」と動きに合わせており、幼児の動きに同調する言葉がけとして、リズム性に富んだオノマトペが使われていた。保育者の声の抑揚やリズムが添えられると、幼児も動きで反応しやすくなるうえ、気分が高揚する。保育者にオノマトペで反応してもらえた幼児は、保育者の反応に対して興味が高まり、保育者をじっと見つめる姿が見られた。

⑤ e 言語化

エピソード⑥で示したように、A 男児がうつ伏せになっていることを、保育者は「おいもさん」と言語化した。これは、幼児の動きの意味付けをする発言である。また、男児5人が身体を寄せ合う様子を「おいもさんがたくさんいる」と発言し、G 男児が目をつぶって寝転んでいるのを見て「お休みしているよ」と発言している。この

ように幼児の素朴な動きに対して、保育者が意味を添える発言である。このことによって、幼児がイメージを広げていると考える。

⑥ f 誘導

エピソード⑦では、保育者が目をつぶって寝転んでいるG男児に近寄って「やさしく、こしょこしょってしようか。」と身体に触れる格好をした。保育者は、他の幼児らに対して、幼児どうしお互いに触れ合う遊びを一緒にしようと誘っているようにも思われた。保育者が一人の幼児に関わる姿を見せることで、他の幼児にも一緒に遊べるのが伝えられ、その結果、幼児どうしで近くの幼児の足やお腹など触れ合う様子が見られた。

また、保育者は、幼児どうしの行き過ぎた関わりにならないようにと、「やさしく、やさしく」と身体に触れる感覚に配慮することも伝えており、身体の使い方、身体の距離などを見せながら誘導する発言であったと思われる。

⑦ g 提案

エピソード⑧で示したように、大きくなったさつまいもに対して、保育者は「先生掘りにいくよ」とより積極的に幼児に関わることを提案した。その後、保育者と幼児との間で、＜掘る－掘られる＞遊びが展開したが、この遊びの楽しさは、幼児が実際に掘られる立場となっはじめて味わえる遊びである。保育者はその感覚を楽しめるようにと、幼児たちが身体を寄せあって寝転んでいる間に入り込んで、幼児の手を引いたり、身体を抱きあげたりしながら幼児に関わった。保育者の新しい遊びの提案によって、幼児は、おいもになって引っ張られることを楽しむ気持ちが高まった。

5. まとめと今後の課題

本論文で取りあげた4歳児の身体表現遊びは、幼児が絵本の世界に表現されているさつまいもが大きくなるイメージを楽しむことから始めた。次に目の前に示された本物のさつまいもを手に取り、形や手触り、匂いなどを確かめながら、感覚を通して対象の理解を深める活動へ展開した。お話の世界、実物を楽しむなど静的な活動から、その絵本の内容について関連する話題を共有することへと発展するが、その中でおいもを掘るという日常の動きへと気づきが広がった。さらに、その日常の動きへの気づきから、おいもに変身するという身体表現遊びへ

と発展した。身体表現遊びでは、おいもになるために、幼児は、床にうつ伏せの姿勢や足を抱えて身体を揺らすなどの動きを生み出した。大きなおいもは、寝ながら身体を寄せ合うという方法で表現することも生み出した。一人の幼児が見つけた動きを幼児どうしで互いに模倣し合い、動きを共有することで集団の身体表現活動へと広がった。

幼児が身体表現を楽しむ過程で、幼児の表現に対する保育者の柔軟な言葉がけは重要であった。まず、保育者が幼児の発言や動きを「肯定」「反復」することで、幼児が自分の発言を受け止めてもらえたと感じることに繋がり、遊びに安心して参加できる基盤が作られていった。次に、保育者が具体的な内容、方法、結果などを幼児に「質問」することで、幼児は考える機会や応える機会が与えられた。さらに、幼児が言葉や動きで返答することで、保育者と幼児が相互にやりとりを楽しむようになっていった。また、保育者の声の抑揚やリズムに「同調」することで、幼児が表現しようとする意欲が高められた。保育者が幼児の素朴な表現を「言語化」し、意味を添えることで、幼児自身がついイメージをさらに広げ、集団での身体表現では、幼児の関わりや遊びの流れが複雑に展開した。遊びが停滞した時には、保育者が幼児たちの動きを「誘導」し、動くことや触れ合うことを促すことも必要であった。また、保育者が新しい遊びを「提案」することで幼児は新しい遊びの体験ができることにも繋がった。

本研究では、幼児の身体表現遊びの観察を行い、そのデータから抽出されたエピソードを分析した。その結果、保育者と幼児の相互作用を高めるのに有効な保育者の言葉がけを分類することができた。その言葉がけの内容は、身体表現遊びの指導に具体的示唆を与えるものと期待される。

今後、身体表現遊びにおける保育者と幼児の相互作用を高めるための指導として、幼児の年齢や幼児間の相互作用を考慮した関わり方を検討することが課題として残された。

謝辞

本研究に際し、ご協力いただきました幼稚園の園長先生をはじめ、担任の先生、園児の皆様には心より感謝申し上げます。

－引用文献－

- 1 本山益子「子どもの身体表現の特性と発達」『子ども・からだ・表現』, 市村出版, 2003, p. 19.
- 2 鈴木裕子「幼児の身体表現活動において発現する双方向的な模倣の機能」『名古屋柳城短期大学研究紀要』, 30, 2008, pp. 115-123.
- 3 長野真弓「幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案」『京都文教大学心理社会的支援研究』, 創刊号, 2010, pp. 29-34.

- 4 松山由美子・古市久子・遠藤晶・田辺昌吾・江原千恵・内藤真希「身体表現の指導の現状に関する調査（２）～保育者の「表現」における悩みより」『日本保育学会第 64 回大会研究論文集』, 2011, p. 449.
- 5 遠藤晶・松山由美子・内藤真希「ふれあい遊びにおける双方向性～手をつなぐ行為に着目して～」『武庫川女子大学大学院教育学研究論集』, 6, 2011, pp. 21-29.
- 6 古市久子『保育表現技術 豊かに育つ・育てる身体表現』, ミネルヴァ書房, 2013, pp. 36-37.
- 7 鈴木裕子「幼児の身体表現あそびにみられる物語展開の過程」『名古屋柳城短期大学紀要』, 24, 2002, pp. 117-128.
- 8 古市久子 前掲書（６）
- 9 渡辺友子・塩尻麻子・福井美和・平野仁美「子どもと保育者が育つ身体表現—草むらごっこを通して」『日本保育学会第 66 回大会研究論文集』, 2013, p. 259.
- 10 正高信夫『子どもはことばをからだで覚える』, 中央公論新社, 2001, pp. 168-169.